

看護学生の社会人基礎力の経年的変化と影響を及ぼす経験要因

鳥取大学医学部保健学科基礎看護学講座（主任教授：深田美香）

奥田玲子，深田美香

Development of the basic social competency by students in the school of nursing: identification of experiential factors that improved it

Reiko OKUDA, Mika FUKADA

*Department of Fundamental Nursing, School of Health Science, Faculty of Medicine,
Tottori University, 86 Nishi-cho, Yonago, Tottori 683-8503, Japan*

ABSTRACT

The purpose of this study was to elucidate how the basic social competency is developed by students in the school of nursing and to identify experiential factors that improved it. Questionnaires were carried out once a year for a four-year period and responses were consistently obtained from a total of 11 subjects. The Friedman test was used to analyze the scores that reflected the basic social competency. Text mining was used to identify experiential factors during the university life that improved the competency. Students in fourth-year exhibited the basic social competency that was significantly higher than those in second-year. Learning activities/practical exercises were associated with the abilities of problem-solving, logical analysis, and listening to others. It appeared that during the university life, students developed the basic social competency that enables them to gather practical experience, identify their own problems and deal with patients effectively. (Accepted on March 7, 2019)

Key words : basic social competency, university students in the school of nursing

はじめに

経済産業省（2006年）は、職場や社会の中で多様な人々と共に仕事をしていくために必要な基礎的な能力を「社会人基礎力」¹⁾と定義した。社会人基礎力を育成するためには、知識教育と連動して、習得した基礎学力・専門知識を活用する実践教育を実施し、そこで必要な知識の不足に気付くことで更なる学ぶ意欲を喚起し、また知識教育に戻つ

ていくという、「知識教育」と「実践教育」の相乗効果による「成長の好循環」を実現することが重要であると考えられている²⁾。看護学基礎教育において授業としての実習は、看護実践能力を培うために極めて重要なものであり、講義・演習の統合という意味合いだけでなく、社会人として、看護師として、自覚と責任ある行動を身につける重要な学習の場として位置づけられている。北島らは、看護系大学生の社会人基礎力は1年次生よりも

4年次生の方が有意に高く³⁾、看護実践能力と有意な正の相関がある⁴⁾ことを示し、実習の経験による学習成果として社会人基礎力の伸長の可能性について言及している。

看護学生は教育機関入学後、講義や演習、実習をとおして看護の専門的知識・技術を習得していく。将来の職業として看護職になることを目指す看護学生は、看護師への予期的社会化が進む中、“初心者 (Novice)”⁵⁾としてふさわしい態度や行動ができることが求められる⁶⁾。看護職をめざす学生は、自分が将来なりたい職業を考えて志望して入学する者が多く、専門職を希望する者は職業レディネス、就職確信度が高い傾向にあり、看護系の学生では、職業レディネスが高いと人間関係志向性も高くなることが報告されている⁷⁾。しかし、白鳥⁸⁾、須釜ら⁹⁾の調査によると、看護学生の職業レディネスは最終学年で低くなっており、学年進級に伴って職業への関心や職業につくことへの意欲が高まっていない可能性が指摘されている。これは、看護学生の多くが20歳前後の青年後期であり、心理学的発達課題の特徴が職業選択に影響を及ぼしているためと考えられる。青年期は自分自身に目覚め、アイデンティティを模索し始めると同時に、社会にも目を向け他者との共存を志向する特徴を有する¹⁰⁾。職業に対する興味や自らの適性にあった職業を模索する時期でもあり、職業的アイデンティティは発展途上の段階にあるといえる。

看護学生を対象とした社会人基礎力に関する先行研究では、同一の対象を一定期間追跡する縦断的調査が散見されるものの、1年間もしくは2年間の追跡期間¹¹⁻¹³⁾にとどまっており、大学生生活4年間の経年的変化を捉えた報告は見当たらない。また、看護学生の社会人基礎力と性格傾向との関連について検討した先行研究は1篇¹⁴⁾あるが、青年期の人間発達との関連から検討したものはない。看護基礎教育の期間中、看護学生の社会人基礎力がどのように発達しているのかを捉えることは、社会人基礎力育成のための効果的な看護学教育のあり方を検討するうえで意義がある。そこで本研究では、看護学生の社会人基礎力の大学入学後4年間の経年的変化と社会人基礎力向上に影響を及ぼした大学生生活での経験要因を明らかにすることを目的とした。

対象および方法

1. 対象

2013年度にA大学看護学専攻に入学した79名のうち、1年次から4年次までの縦断調査により継続的に回答が得られた者を対象とした。

2. 調査時期、調査方法

臨地実習による社会人基礎力の発達を捉えるため、1年次は基礎看護学実習Ⅰ開始前(7月)、2年次は基礎看護学実習Ⅱ終了後(9月)、3年次はその他の領域別実習開始前(9月)、4年次はすべての実習終了後(11月)に調査した。調査は無記名自記式質問紙を用いて行った。縦断追跡のため、乱数表を用いて対象にコード番号を付して連結可能匿名化した。コード番号の管理は統計解析にかかわらない研究協力者が行った。質問紙は留置き式回収箱への個別投函法により回収した。

3. 調査内容

1) 基本属性

対象者の属性は、学年、年齢、性別、世帯、社会人経験の有無を尋ねた。また、大学生活における重点項目(専攻の学業、アルバイト、部活・サークル活動、趣味、ボランティア活動、友人や仲間との交流)について、「ほとんど重視していない:1点」から「とても重視している:5点」の5点法で回答を求めた。

2) 社会人基礎力

社会人基礎力は、前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力(アクション)、疑問を持ち、考え抜く力(シンキング)、多様な人々とともに、目標に向けて協力する力(チームワーク)の3つの能力から成り立つ¹⁵⁾。測定尺度は、これらの3つの能力を構成する12能力要素(主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力)の36項目に、A大学の教育デザインに含まれる、経験力と論理的分析力に関する項目を追加して作成した。経験力は、木村ら(2011)によって開発された経験学習尺度¹⁶⁾、論理的分析力は、平山ら(2004)によって開発された批判的思考態度尺度¹⁷⁾から、因子ごとに負荷量が高かった4項目ずつを選定した。試作の尺度を用いて、近隣の看護学校の学生77名を対象に予備調査を実施し、経験力と論理的分析力の質問項目は、それぞれの項目間の相関と項目内容にもとづいて3項目

表1 社会人基礎力14能力要素の項目と3能力

能力	能力要素	項目
アクション	主体性	自分がやるべきことは何かを見極め、自発的に取り組んでいる。
		困難なことでも自分の強みを活かして取り組んでいる。
	働きかけ力	自分なりに判断し、他者に流されず行動している。
		他者の協力を得るために、協力することの理由や内容などを納得できるよう伝えている。
Cronbach $\alpha=0.87$	実行力	状況に応じて効果的な協力を得るためにさまざまな手段を活用している。
		目標を達成するために積極的に周囲の人に働きかけている。
	経験力	目標達成に向かって粘り強く取り組み続けている。
		とにかくやってみようとする果敢さをもって物事に取り組んでいる。
シンキング	論理的 分析力	困難な状況から逃げずに物事に取り組んでいる。
		さまざまな経験の機会を求めている。
	課題 発見力	経験したことを多様な視点から捉え直し分析している。
		経験をとおして学んだことを実際に役立てている。
Cronbach $\alpha=0.83$	計画力	複雑な問題について順序立てて考えている。
		いつも偏りのない判断をしようとしている。
	創造力	結論を下す場合には、確たる証拠の有無にこだわっている。
		目標達成のために、現段階でなすべきことを的確に把握している。
チームワーク	柔軟性	現状を正しく認識するための情報収集や分析をしている。
		課題を明らかにするために、他者の意見を積極的に求めている。
	傾聴力	目標達成までのプロセスを明らかにして優先順位をつけ、実現性の高い計画を立てられる。
		進捗状況や不測の事態に合わせて、柔軟に計画を修正している。
Cronbach $\alpha=0.88$	状況 把握力	複数のもの、考え方、技術などを組み合わせて、新しいものをつくり出している。
		従来常識や発想を転換し、新しいものや解決策をつくり出している。
	規律性	目標達成を意識しながら、新しいものを生み出すためのヒントを探している。
		事例や客観的なデータなどを用いて、具体的にわかりやすく伝えている。
ストレス コントロール	規律性	聞き手がどのような情報を求めているかを理解して伝えている。
		話そうとすることを自分なりに十分に理解したうえで伝えている。
	ストレス コントロール	内容の確認や質問などを行いながら、相手の意見を正確に理解している。
		あいづちや共感などにより、相手に話しやすい状況をつくっている。

ずつ選出した。社会人基礎力の構成要素はそのままに保ち、経験力と論理的分析力を新たな能力要素に加えた14能力要素42項目について、「あてはまらない：1点」から「あてはまる：5点」の5件法で回答を求めた。得点が高いほど、社会人基礎力が高いことを意味する。各能力におけるCronbach

α 係数は、アクションが $\alpha=0.87$ 、シンキングが $\alpha=0.83$ 、チームワークが $\alpha=0.88$ であった。社会人基礎力14能力要素の項目と3能力を表1に示す。なお、看護学生の社会人基礎力がどのような経験によって培われているのか、その具体的な内容を把握するため、4年次の調査では尺度による測定に加

え、社会人基礎力の向上に影響した大学生活での経験について自由回答を求めた。

3) 職業レディネス

若林ら(1983)によって開発された、職業選択に対する準備状態を表す職業レディネス尺度¹⁸⁾を用いた。5つの下位概念(職業選択への関心:6項目、選択範囲の限定性:6項目、選択の現実性:6項目、選択の主体性:6項目、自己知識の客観性:6項目)30項目から構成され、総合的な単一尺度として用いられる。「まったく当てはまらない:1点」から「4点:非常に当てはまる」の4件法で回答を求め、逆転項目の評定値は反転処理した。得点が高いほど職業に就くことに対し、成熟した考えをもっていることを意味する。尺度全体のCronbach α 係数は $\alpha = 0.86$ で信頼性は確保されている。

4) 人間発達の志向性

伊藤(1993)によって開発された、人間の発達を2つの方向性から捉える個人志向性・社会志向性尺度¹⁹⁾を用いた。自分自身の内的基準への志向性を示す個人志向性と、他者あるいは社会への規範への志向性を示す社会志向性の2つの下位尺度により構成される。質問項目は計17項目で、個人志向性は、「自分の信念に基づいて生きている」、「周りと反対でも自分が正しいと思うことは主張できる」など8項目、社会志向性は、「社会のために役立つ人になりたい」、「人とのつながりを大切にしている」など9項目で構成される。「あてはまらない:1点」～「あてはまる:5点」の5件法で回答を求め、逆転項目の評定値は反転処理した。得点が高いほど個人志向性では自律的な自己実現状態であり、社会志向性では社会の中でうまく適応していることを意味する。下位尺度のCronbach α 係数は個人志向性 $\alpha = 0.88$ 、社会志向性 $\alpha = 0.85$ で尺度の信頼性は確保されている。

4. 分析方法

1) 統計解析

社会人基礎力は総得点および能力別合計得点、職業レディネス合計得点、人間発達の志向性の個人志向性および社会志向性は平均得点を算出した。社会人基礎力の経年的変化はFriedman 検定を行い、有意差がみられた場合は多重比較を行った。社会人基礎力と職業レディネスおよび人間発達の志向性との相関は、Spearmanの順位相関係数を求めた。統計解析ソフトはSPSS Statistics For Surveys version 24 (IBM社、東京)を用いた。有

意水準は5%とした。

2) テキストマイニング

自由回答の分析は、テキストマイニング(Text Mining: TM)を以下の手順で行った。

テキストデータ化した記述内容は、意味的に何についてのコメントなのか主語となる能力要素を一文ごとに追記して切片化し、分析単位を設定した。TMソフトにテキストデータを読み込み、はじめのキーワード抽出後、「対象者」「患者」「患者さん」「Pt」、「かわり」「関わり」などの異なる表記で同じ意味の語は類義語に、「ある」「くる」「もらう」などは不用語に追加した。キーワードの抽出結果をもとに、名詞、動詞の品詞タイプに着目して出現頻度にもとづいてカテゴリを自動生成し、意味を考慮してカテゴリを結合、カテゴリ名を変更した。また、意味のないカテゴリは削除した。再編成したカテゴリは、能力要素、経験の種類と経験に関連する内容に分類した。さらに、カテゴリの間で共有される回答数を把握するため、カテゴリ間の共通性はカテゴリWebを用いて視覚化した。TMの出力結果の信頼性を確保するため、TMはSPSS社の研修受講者が行った。また、出力結果の解釈の妥当性を確保するため、研究者間で分析の過程を共有した。分析ソフトはSPSS Text Analytics For Surveys version 4.0 (IBM社、東京)を用いた。

5. 倫理的配慮

1年次での研究協力の依頼は、対象の学生が集まる講義室で文書と口頭により研究の趣旨を説明し、同意書の提出によって研究に参加する同意を得た。2年次以降は、前年度に協力が得られた対象に対し、調査時期ごとに研究参加への意思を確認した。研究への参加は成績にまったく関係しないこと、研究に参加しない場合でも不利益を受けないことを保証した。また、研究への参加の同意後も撤回できること、撤回した場合も不利益を受けないことを保証した。研究協力の依頼は成績認定者と異なる者が行った。本研究は、鳥取大学医学部倫理審査委員会の承認を得て実施した(No. 2163)。

結 果

1. 対象の基本属性

各学年次の回答者(回収率)は、1年次35名(44.3%)、2年次26名(74.2%)、3年次18名(69.2%)、

表2 大学生生活の重点項目の割合

		1年次		2年次		3年次		4年次	
		n	(%)	n	(%)	n	(%)	n	(%)
専攻の学業	重視していない	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)
	どちらでもない	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)
アルバイト	重視している	11	(100.0)	11	(100.0)	11	(100.0)	11	(100.0)
	重視していない	8	(72.7)	5	(45.5)	6	(54.5)	7	(63.6)
趣味	重視している	2	(18.2)	5	(45.5)	3	(27.3)	3	(27.3)
	重視していない	2	(18.2)	5	(45.5)	3	(27.3)	2	(18.2)
部活・サークル	重視している	5	(45.5)	5	(45.5)	6	(54.5)	8	(72.7)
	重視していない	5	(45.5)	1	(9.1)	1	(9.1)	1	(9.1)
ボランティア	重視している	4	(36.4)	8	(72.7)	9	(81.8)	7	(63.6)
	重視していない	5	(45.5)	6	(54.5)	7	(63.6)	8	(72.7)
友人・仲間との交流	重視している	3	(27.3)	3	(27.3)	3	(27.3)	3	(27.3)
	重視していない	3	(27.3)	2	(18.2)	1	(9.1)	0	(0.0)
	重視している	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(9.1)
	重視していない	1	(9.1)	0	(0.0)	2	(18.2)	2	(18.2)
	重視している	10	(90.9)	11	(100.0)	9	(81.8)	8	(72.7)

表3 社会人基礎力の経年的変化

得点範囲	社会人基礎力 総得点	アクション 合計得点	シンキング 合計得点	チームワーク 合計得点
	最大210 - 最小42	最大60 - 最小12	最大60 - 最小12	最大90 - 最小18
1年次	150 (164 - 137)	43 (48 - 34)	39 (45 - 37)	68 (71 - 64)
2年次	138 (152 - 133)	41 (49 - 35)	33 (43 - 28)	65 (71 - 57)
3年次	152 (160 - 141)	45 (49 - 38)	40 (48 - 35)	70 (72 - 64)
4年次	159 (170 - 150)	46 (48 - 42)	41 (48 - 39)	73 (75 - 69)

中央値 (75パーセンタイル - 25パーセンタイル)
Friedman 検定 *p < 0.05

4年次11名 (61.1%) であった。分析対象は、4年間継続して回答が得られた11名とした。対象は、女性10名 (90.9%)、男性1名 (9.1%)、ひとり暮らしをしている者は9名 (81.8%)、社会人経験者はいなかった。

大学生活における重点の程度は、「どちらともいえない：3点」を基準に、それより高い得点を「重視している」、低い得点を「重視していない」として3つに区分した。重点項目ごとの回答の割合を表2に示す。「専攻の学業」はすべての学年次で全員が重視していた。「アルバイト」は2年次で重視する人が5人 (45.5%) と最も多かったが、3年次以降は減少した。「趣味」は学年が上がるにつれ重視する人が増え、4年次では8人 (72.7%) であった。「部活・サークル活動」は2年次8人 (72.7%) と3年

次9人 (81.8%) で重視する人が多かった。「ボランティア」はすべての学年次を通してあまり重視されていなかった。「友人・仲間との交流」は2年次で全員が重視していたが、3年次以降は減少した。

2. 社会人基礎力の経年的変化と職業レディネスおよび人間発達の志向性との関係

社会人基礎力の経年的変化を表3、社会人基礎力と職業レディネスおよび人間発達の志向性との関係を表4に示す。社会人基礎力の総得点は2年次で138点と最も低かったが、4年次では159点と高くなり、2年次と4年次との間で有意差がみられた (p=0.01)。能力別の合計得点では、シンキングとチームワークで2年次と4年次との間で有意差がみられた (p=0.02, p=0.04)。社会人基礎力と職業レディネスとの関係は、2年次において有意な中程度

表4 社会人基礎力と職業レディネスおよび人間発達の志向性との関係

	職業レディネス	人間発達の志向性	
		個人志向性	社会志向性
社会人基礎力	1年次	.589	.696 *
	2年次	.673 *	.764 **
	3年次	.127	.051
	4年次	.144	.743 **

Spearman順位相関係数

*P < 0.05 **P < 0.01

表5 各能力のカテゴリとレコードに含まれるカテゴリの割合

	アクション (レコード数 20)		シンキング (レコード数 22)		チームワーク (レコード数 29)	
	カテゴリ	選択%	カテゴリ	選択%	カテゴリ	選択%
能力要素	働きかけ力	30.0	課題発見力	45.5	傾聴力	27.6
	主体性	25.0	論理的的分析力	27.3	ストレスコントロール力	24.1
	実行力	25.0	計画力	22.7	発信力	20.7
	経験力	20.0	創造力	4.5	規律性	13.8
経験の種類					柔軟性	10.3
					状況把握力	3.4
	学習活動/実習	25.0	学習活動/実習	81.8	学習活動/実習	48.3
	学習活動/講義・演習	15.0	学習活動/講義・演習	18.2	課外活動/部活動	20.7
	私的活動/その他(海外旅行, 一人暮らしなど)	20.0	学習活動/課題研究	4.5	課外活動/サークル	3.4
	私的活動/アルバイト	15.0			私的活動/アルバイト	13.8
	私的活動/ボランティア	5.0				
	課外活動/部活動	20.0				
	課外活動/サークル	10.0				
	経験に関連する内容	グループワーク	15.0	自分(自己, 自身, 自己)	27.3	話し合う(話し合い, 意見交換, 説明, 聴く)
役割/イベント責任者		5.0	課題	22.7	グループワーク(活動, ワールドワーク)	17.2
役割/学級委員		5.0	対象者との関わり(ニーズ, 援助, 安全, 安楽)	18.2	グループメンバー(メンバー, 皆)	13.8
役割/幹事		5.0	アセスメント(身体状態, 予測, 現状, アセスメント)	18.2	カンファレンス	13.8
役割/幹部		5.0	振り返る(振り返り, リフレクション, 考え直す)	18.2	ルール・約束事	10.3
責任		5.0	傾向(くせ, 傾向)	13.6	楽しみ(楽しみ, 趣味, 気分転換)	10.3
確認		5.0	レポート	9.1	役割	6.9
連携		5.0	次の目標(活かす, 取り組む)	9.1	対象者	6.9
協力		5.0	根拠	4.5	連携	3.4
実習グループ		5.0	実習記録	4.5	報告	3.4
			行動計画	4.5	礼儀	3.4

カテゴリ内の()はカテゴリに含まれるキーワード

の正の相関 ($P < 0.05$) がみられた。また、社会人基礎力と人間発達の志向性との関係では、個人志向性は2年次で有意な強い正の相関 ($P < 0.01$)、社会志向性は1年次で有意な中程度の正の相関 ($P < 0.05$)、2年次と4年次で有意な強い正の相関 ($P < 0.01$) がみられた。

3. 社会人基礎力の向上に影響を及ぼす大学生活での経験要因

1) 各能力のレコードに含まれるカテゴリの割合

分析対象のレコード数は71レコードで、能力別にアクション20レコード、シンキング22レコード、チームワーク29レコードであった。抽出されたコンセプトは総計139語で、名詞71語、動詞49語、形容動詞12語、形容詞5語、その他2語で、コンセ

プトの出現頻度にもとづいて生成されたカテゴリは、アクション14カテゴリ、シンキング16カテゴリ、チームワーク23カテゴリであった。各能力のカテゴリとレコードに含まれるカテゴリの割合を表5に示す。以下、カテゴリは〈 〉で表す。

各能力のレコードに含まれたカテゴリの割合は、能力別では、アクション20レコードのうち〈働きかけ力〉30.0%、〈主体性〉25.0%、〈実行力〉25.0%、〈経験力〉20.0%、シンキング22レコードのうち〈課題発見力〉45.5%、〈論理的的分析力〉27.3%、〈計画力〉22.7%、〈創造力〉4.5%、チームワーク29レコードのうち〈傾聴力〉27.6%、〈ストレスコントロール力〉24.1%、〈発信力〉20.7%、〈規律性〉13.8%、〈柔軟性〉10.3%、〈情況把握力〉3.4%であった。経験の種類では、アクションは〈学習活動／実習〉25.0%、〈学習活動／講義・演習〉15.0%、〈私的活動／その他〉20.0%、〈私的活動／アルバイト〉15.0%、〈課外活動／部活〉20.0%など、シンキングは〈学習活動／実習〉81.8%、〈学習活動／講義・演習〉18.2%など、チームワークは〈学習活動／実習〉48.3%、〈課外学習／部活〉20.7%、〈私的活動／アルバイト〉13.8%であった。経験に関連する内容では、アクションは〈グループワーク〉15.0%など、シンキングは〈自分〉27.3%、〈課題〉22.7%、〈対象者との関わり〉18.2%、〈アセスメント〉18.2%、〈振り返る〉18.2%など、チームワークは〈話し合う〉27.6%、〈グループワーク〉17.2%、〈グループメンバー〉13.8%、〈カンファレンス〉13.8%などであった。

2) カテゴリ間の共通性

能力要素、経験の種類、経験に関連する内容のカテゴリ間の共通性をカテゴリWebで視覚化したものを図1に示す。なお、カテゴリ間の共通性を網羅的に把握するため、すべての回答について可視化した。カテゴリWebの●はノードと呼ばれ、各ノードはカテゴリを意味する。ノードの大きさはカテゴリのレコード数に基づいた相対的なサイズで示され、カテゴリ間の線の太さは重複している共通のレコード数を意味する。ノード間の位置、距離は意味を持たない。能力要素と共通性があつたカテゴリは、アクションでは〈私的活動／その他（海外旅行や一人暮らしなど）〉は〈実行力〉と3レコード、〈課外活動／部活〉〈学習活動／講義・演習〉は〈主体性〉と2レコード、〈学習活動／講義・演習〉をとおした〈グループワーク〉は〈働

きかけ力〉と2レコード、〈学習活動／実習〉は〈経験力〉と2レコードの共通性があつた（図1-1）。シンキングでは〈学習活動／実習〉は〈課題発見力〉と6レコード、〈自分〉は〈課題発見力〉は6レコード、〈課題〉は〈課題発見力〉と5レコードの共通性があつた。また、〈学習活動／実習〉は〈論理的的分析力〉と5レコード、〈学習活動／実習〉をとおした〈アセスメント〉〈対象者とのかかわり〉は〈論理的的分析力〉と2レコードの共通性があつた（図1-2）。チームワークでは〈学習活動／実習〉は〈傾聴力〉と6レコード、〈話し合う〉は〈傾聴力〉と4レコード、〈カンファレンス〉は〈傾聴力〉と3レコードの共通性があつた。また、〈学習活動〉〈話し合う〉は〈発信力〉と2レコード、〈課外活動／部活〉〈ルール・約束事〉は〈規律性〉と2レコード、〈学習活動／実習／実習中〉〈課外活動〉〈楽しみ〉は〈ストレスコントロール力〉と2レコードの共通性があつた（図1-3）。

考 察

社会人基礎力の経年的変化

社会人基礎力の経年的変化では、2年次にいったん低下した後、4年次にかけて高まる傾向がみられた。特に、シンキングとチームワークは4年次で得点有意に高く、学年が上がるほど能力が高いことが示された。北島³⁾、奥田²⁰⁾による横断的調査でも、4年次は社会人基礎力が有意に高いことが報告されており、本調査で得られた結果と類似していることから、結果の一般性は高いと考えられる。社会人基礎力の2年次と4年次の差異について、その理由の一つとして看護実践の経験の違いが挙げられる。看護の実践にあたっては、看護の対象となる人々の健康状態のみならず、その人の生活史や現状での役割や価値観など、全体像を把握することが求められる。そのうえで、対象の状況を判断したり、問題を発見したり、必要なケアを見出して計画を立てるなど、考え抜く力が要求される。これらは、経済産業省が提唱する「社会人基礎力」を構成する3つの能力と共通するものであり、社会人基礎力は看護実践と相互作用的な関係にあるとされている²¹⁾。A大学では、2年次の実習で初めて2週間継続して患者を受け持ち、看護の難しさや奥深さを体験する。2年次での社会人基礎力の得点の低下は、看護職への興味・関心が高まる一方で、臨床現場でさまざまな状況に直面し、

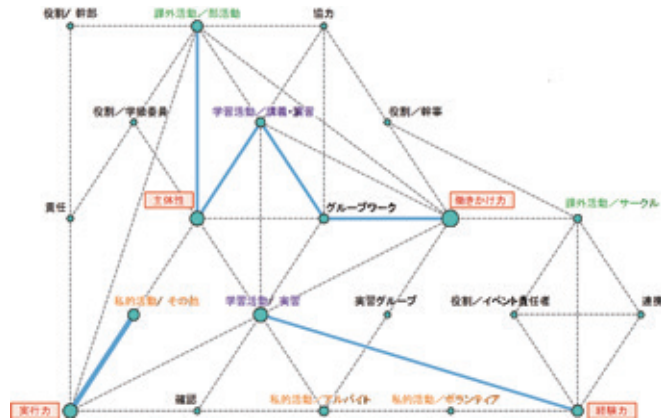


図1-1 アクションのカテゴリの共通性

カテゴリの共通性：2つのカテゴリ間で共有されているレコードのことをいう。
 カテゴリ間の線の太さ：重複している共通のレコード数に基づいた相対的なサイズを表す。
 ●（ノード）：各ノードはカテゴリを表す。
 ノードの大きさ：カテゴリのレコード数に基づいた相対的なサイズを表す。
 ノード間の位置：ノード間の左右前後の関係，距離は意味を持たない。
 四角の枠で囲まれた単語：抽出された社会人基礎力の能力要素を示す。

アクションでは〈私的活動／その他（海外旅行や一人暮らしなど）〉は〈実行力〉と3レコード，〈課外活動／部活〉〈学習活動／講義・演習〉は〈主体性〉と2レコード，〈学習活動／講義・演習〉をとおした〈グループワーク〉は〈働きかけ力〉と2レコード，〈学習活動／実習〉は〈経験力〉と2レコードの共通性があった。

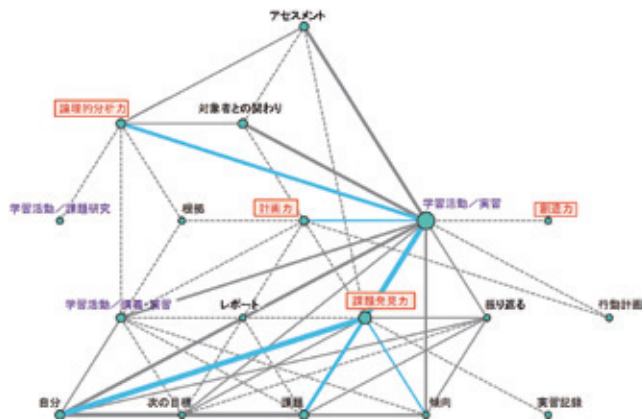


図1-2 シンキングのカテゴリ間の共通性

カテゴリの共通性：2つのカテゴリ間で共有されているレコードのことをいう。
 カテゴリ間の線の太さ：重複している共通のレコード数に基づいた相対的なサイズを表す。
 ●（ノード）：各ノードはカテゴリを表す。
 ノードの大きさ：カテゴリのレコード数に基づいた相対的なサイズを表す。
 ノード間の位置：ノード間の左右前後の関係，距離は意味を持たない。
 四角の枠で囲まれた単語：抽出された社会人基礎力の能力要素を示す。

シンキングでは〈学習活動／実習〉は〈課題発見力〉と6レコード，〈自分〉は〈課題発見力〉は6レコード，〈課題〉は〈課題発見力〉と5レコードの共通性があった。また，〈学習活動／実習〉は〈論理的分析力〉と5レコード，〈学習活動／実習〉をとおした〈アセスメント〉〈対象者とのかわり〉は〈論理的分析力〉と2レコードの共通性があった。

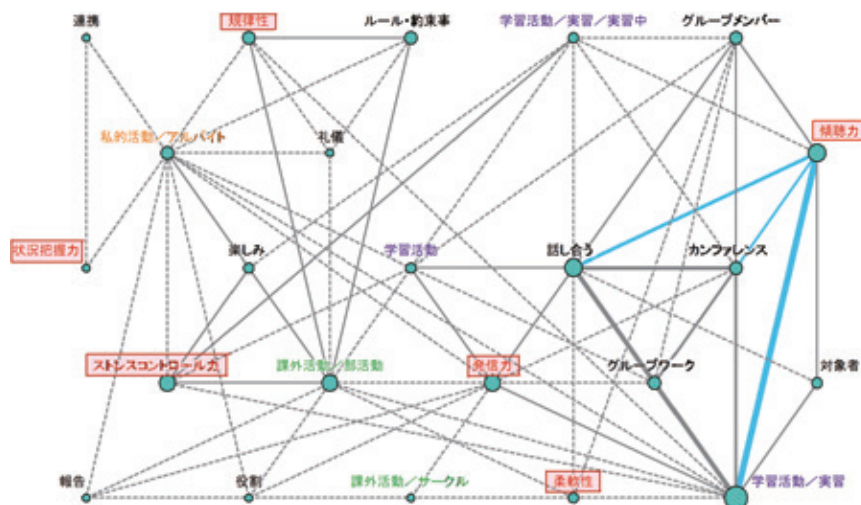


図1-3 チームワークのカテゴリの共通性

カテゴリの共通性：2つのカテゴリ間で共有されているレコードのことをいう。

カテゴリ間の線の太さ：重複している共通のレコード数に基づいた相対的なサイズを表す。

●（ノード）：各ノードはカテゴリを表す。

ノードの大きさ：カテゴリのレコード数に基づいた相対的なサイズを表す。

ノード間の位置：ノード間の左右前後の関係、距離は意味を持たない。

四角の枠で囲まれた単語：抽出された社会人基礎力の能力要素を示す。

チームワークでは〈学習活動/実習〉は〈傾聴力〉と6レコード、〈話し合う〉は〈傾聴力〉と4レコード、〈カンファレンス〉は〈傾聴力〉と3レコードの共通性があった。また、〈学習活動〉〈話し合う〉は〈発信力〉と2レコード、〈課外活動/部活〉〈ルール・約束事〉は〈規律性〉と2レコード、〈学習活動/実習/実習中〉〈課外活動〉〈楽しみ〉は〈ストレスコントロール力〉と2レコードの共通性があった。

医療や看護に関する知識・技術の不足や自分の未熟さに不安や心配を感じたためと考えられる。

また、社会人基礎力は職業レディネスおよび人間発達の志向性と有意な正の相関があった。社会人基礎力は3年次以降学年が上がるほど能力が高くなり、それに伴い職業レディネスと人間発達の志向性も高まることが示された。社会人基礎力が最も高まる4年次では社会志向性と正の強い相関がみられた。長塚²²⁾は、看護学生にとって、看護に対して達成したい目標を持つことは、将来の職業に通じる目標をもつことであり、その目標を達成する中で成長することが就業動機につながると述べている。また、阿部ら²³⁾は、看護学生の達成動機は、学習の進行に伴う自己課題や不安によって揺れ動きながらも、高い状態が維持されていると述べている。看護の学びから得られる成長感ややりがいは学生を内発的に動機づけ、看護師への予期的社会化を促進するといえる。以上のことが

ら、看護学生の社会人基礎力は、看護を学んでいく中で自分と職業との関係性を捉え、この自分でもよいという自己肯定感やこの自分でやっていると同一性の発達²⁴⁾をとおして獲得されていることが示唆される。

社会人基礎力の向上に影響を及ぼす経験要因

4年間の大学生活で社会人基礎力の向上に影響をおよぼした経験について、自由記述の内容をテキストマイニングにより検討した。分析結果から、〈学習活動〉はアクションの〈主体性〉〈働きかけ力〉〈経験力〉、シンキングの〈課題発見力〉〈論理的分析力〉、チームワークの〈傾聴力〉などに関係していた。特に、〈学習活動/実習〉はシンキングとチームワークで出現頻度が高かった。〈学習活動/実習〉と共通性があった能力要素に着目すると、アクションの〈経験力〉からは、学生は臨床現場で経験したことをとおして学んだことを次の看護実践に役立てていたことが窺えた。シンキ

ングの〈課題発見力〉は〈学習活動／実習〉と同様に〈自分〉〈課題〉とも関係が強かった。また、〈学習活動／実習〉は〈レポート〉〈振り返る〉を介して〈自分〉〈課題〉とつながりがあったことから、実習でのレポートや振り返りが客観的に自分を見つめ直し、自己の課題に気づく機会となっていたことが推察される。〈論理的分析力〉は〈学習活動／実習〉と同様に〈アセスメント〉〈対象者とのかかわり〉とも関係があった。また、〈学習活動／実習〉は〈アセスメント〉〈対象者とのかかわり〉とつながりがあった。このことから、患者の身体状態や現状から予測されることなどを判断し、ニーズを捉え、援助を提供する看護過程を展開する中で、論理的な思考が培われていたと推察される。チームワークの〈傾聴力〉は〈学習活動／実習〉と同様に〈話し合う〉〈カンファレンス〉とも関係があった。また、〈学習活動／実習〉は〈カンファレンス〉〈グループワーク〉とつながりがあった。このことから、カンファレンスの場で議論をしたり、グループメンバーとの協同作業をとおして、相手の考えや気持ちを引き出す力が培われていたと推察される。

看護職には絶えず対象の立場にたって、対象に不利益や苦痛が生じないように、対象の意思決定や権利を遵守する倫理的行動が必要となる²⁵⁾。このような倫理に基づいた看護を実践するためには、対象の考えや気持ちを引き出す積極的傾聴や、状況を判断して必要なケアを見出し、さまざまな人との関係性の中で行動していく、社会人基礎力に相当する能力が必要不可欠である。倫理的能力を磨くことはすなわち、社会人基礎力の向上にも寄与するといえる。看護学生の社会人基礎力を育成するためには、実習での看護実践の経験を振り返り、自分の看護行為が倫理的判断に基づくものであったか、自己と対峙することで課題を見出し、その課題に取り組めるよう支援していくことが重要であると考えられる。

〈課外活動〉と〈私的活動〉はアクションの〈主体性〉〈実行力〉、チームワークの〈規律性〉〈ストレスコントロール〉などに関係していた。本調査の対象は半数以上が部活動やサークルに参加しており、実習や就職活動などで多忙になる3年次以降も約6割が重点を置いていた。また、趣味や友人・仲間との交流にも重点を置いている者が多かった。井芹ら²⁶⁾は、社会人基礎力が高い人は自

我同一性達成地位の者が多く、日常的活動での積極的関与を指摘している。また、廣岡ら²⁷⁾は、友人・仲間との交流は人間の多様性を理解したり、論理的に物事を伝えたり理解しようとする志向性を高めると述べている。部活動やサークルへの参加、友人・仲間との交流は、大学生活を充実させるものであることから、正課教育のみならず、正課外活動を通じた経験は社会人基礎力の獲得に寄与すると考える。社会人基礎力は、それ自体が単体で高まるものではなく、さまざまな経験や活動をとおして相互に影響しながら高まると考えられている²⁸⁾。大学での学びは学業に限らず、生活面での主体的な行動によっても得られ、充実した学生生活が学生の成長の糧になっていることを理解しておく必要がある。また、学生自身が社会人基礎力を高めることの必要性を理解し、自らの課題を見つけ、主体的にその課題に向き合い取り組めるよう支援していく必要がある。

本研究の限界と課題

縦断的調査法に内在する問題として回収率が低く、対象の特性の偏りが結果に影響していると考えられる。また、調査時点の心理状態が回答に影響した可能性がある。テキストマイニングの分析過程においては、データクリーニングやカテゴリ化の際に研究者の主観が入り込むことは避けられない。

今後は、在学中の調査と卒業後の追跡調査を計画的に実施することで、長期的に社会人基礎力の獲得過程を捉え、看護実践能力との関連からキャリア発達のための支援について検討していくことが課題である。

結 語

本研究では、大学入学後4年間の縦断的調査を実施し、看護学生の社会人基礎力の経年的変化と社会人基礎力の向上に影響を及ぼした大学生活での経験要因について検討した。その結果、看護学生の社会人基礎力は2年次にいったん低下した後、4年次にかけて高まる傾向がみられ、シンキングとチームワークにおいて4年次の得点が有意に高かった。社会人基礎力が最も高まる4年次では、人間発達の社会志向性と正の強い相関がみられた。社会人基礎力の向上に影響を及ぼした経験として、〈学習活動〉はアクションの〈主体性〉〈働きかけ力〉〈経験力〉、シンキングの〈課題発見力〉〈論

理的的分析力), チームワークの〈傾聴力〉などに
関係していた。〈課外活動〉と〈私的活動〉はア
クションの〈主体性〉〈実行力〉, チームワークの
〈規律性〉〈ストレスコントロール〉などに関係し
ていた。

本研究を行うにあたり, ご協力いただきました看護
学生の皆様に心より感謝いたします。なお本研究は,
日本看護研究学会中国・四国地方会第31回学術集にて
発表した。

文 献

- 1) 林 揚哲, 内野泰明, 壺井秀一. 社会人基礎
力 育成の手引き - 日本の将来を託す若者
を育てるために - 教育の実践現場から. 経
済産業省政策局産業人材政策室編, 朝日新聞
社: 東京; 2010. p. 2-3.
- 2) 「社会人基礎力」育成のススメ ~社会人基
礎力育成プログラムの普及を目指して~. 経
済産業省政策局産業人材政策室編, [http://
www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku_
chosa.html](http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku_chosa.html) (閲覧日2019年2月20日)
- 3) 北島洋子, 細田泰子, 星和美. 看護系大学生
の社会人基礎力の構成要素と属性による相違
の検討. 大阪府立大学看護学部紀要 2011; **17**
(1): 13-23.
- 4) 北島洋子, 細田泰子, 星和美. 看護系大学生
の社会人基礎力と看護実践力および日常生活
経験の関係. 日本看護学教育学会誌 2012; **22**
(1): 1-12.
- 5) パトリシア ベナー著. 井部俊子, 井村真澄,
上泉和子訳. ベナー看護論 達人ナースの卓
越性とパワー. 医学書院: 東京; 1992. p. 15.
- 6) 勝原裕美子. 看護師のキャリア論. 第2章
看護師になる, 2つの社会化. ライフサポー
ト社: 神奈川; 2007. p. 48-49.
- 7) 若林満, 後藤宗理, 鹿内啓子. 職業レディネ
スと職業選択の構造 - 保育系, 看護系, 人
文系女子短大生における自己概念と職業意識
との関連 -. 名古屋大学教育學部紀要 教育
心理学科 1983; **30**: 63-98.
- 8) 白鳥さつき. 看護学生の職業社会化に関する
研究. 山梨医科大学紀要 2002; **19**: 25-30.
- 9) 須釜真由美, 井上映子, 今井宏美, 高安百
代, 堀之内若名. 看護学生の職業レディネス
に関する縦断調査. 千葉県立衛生短期大学紀
要 2008; **26** (2): 99-104.
- 10) 伊藤美奈子. 個人志向性・社会志向性に関す
る発達の研究. 教育心理学研究 1993; **41** (3):
51-59.
- 11) 切明美保子, 壬生寿子. 看護大学生の社会人
基礎力の年次変化から見たキャリア形成支
援内容の検討 (第1報). 八戸学院大学紀要
2018; **56**: 133-139.
- 12) 市川裕美子, 山野内靖子. 看護学生の社会人
基礎力の学年別自己評価と変化. 八戸学院大
学紀要 2018; **56**: 161-166.
- 13) 梅川奈々, 北尾良太, 新井祐恵, 小園節子,
山瀧直美, 緒方由美子. 成人看護学実習の前
後で変化した看護学生の社会人基礎力. 日本
看護学会論文集: 看護教育 2015; **45**: 98-101.
- 14) 安東由佳子, 金子典代, 池田由紀, 小林敏生.
大学入学早期の看護学生における社会人基礎
力と性格傾向および職業キャリアレディネス
の関連. 日本看護研究学会雑誌 2016; **39** (3):
222.
- 15) 前掲書1) p. 39.
- 16) 木村充, 館野泰一, 関根雅泰, 中原淳. 職場
における経験学習尺度の開発の試み. 日本教
育工学会研究報告集 2011; **11**: 147-152.
- 17) 平山るみ, 楠見孝. 批判的思考態度が結論導
出プロセスに及ぼす影響 - 証拠評価と結論生
成課題を用いての検討 -. 教育心理学研究
2004; **52**: 186-198.
- 18) 堀洋道, 山本真理子, 松井豊. 心理尺度ファ
イル - 人間と社会を測る - 3 職業・職場・集
団 職業レディネス尺度. 垣内出版: 東京;
1994. p. 483-488.
- 19) 伊藤美奈子. 個人志向性・社会志向性尺度の
作成及び信頼性・妥当性の検討. 心理学研究
1993; **64** (2): 115-122.
- 20) 奥田玲子, 深田美香, 粟納由記子. 看護系大
学生の社会人基礎力の発達: 第2報 職業レ
ディネスおよび人間発達の志向性との関係.
日本看護研究学会雑誌 2014; **37** (3): 239.
- 21) 箕浦とき子, 高橋恵. 看護職としての社会人
基礎力の育て方 専門性の発揮を支える3つの
能力・12の能力要素. 日本看護協会出版会:
東京; 2018. p. 6.
- 22) 長塚美和. 看護学生の達成動機と就業動機

- との関連. 生老病死の行動科学2005; **10**: 111-122.
- 23) 阿部朋子, 重松豊美, 服部容子. 看護学生の看護職への志向の特徴 - A大学入学後1年間の変化 -. 甲南女子大学研究紀要 看護学・リハビリテーション学編 2011; **5**: 33-40.
- 24) 中新美保子, 谷原政江, 長江宏美, 大場広美, 太田にわ, 砂田正子, 山口三重子, 留田通子, 福山礼子. 看護学生の心理社会的発達 - 看護大学生・看護専門生・非看護系学生の比較 -. 川崎医療福祉学会誌 2005; **15** (1) : 289-293.
- 25) 前掲書 21) p. 17-18.
- 26) 井芹まい, 河村茂雄. 大学生の社会人基礎力の獲得タイプと自我同一性との関連. 早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊 2015; **23** (2) : 61-71.
- 27) 廣岡秀一, 中西良文, 横矢規. 大学生のクリティカルシンキング志向性と大学生活経験. 三重大学教育学部研究紀要 2006; **57**: 121-133.
- 28) 前掲書1) p. 3.